

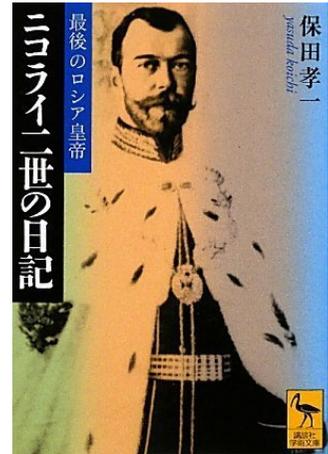
## 5. 皇太子ニコライの来日

### 1. ニコライ2世の日記

ロシア帝国最後の皇帝ニコライ2世 Николай II, Никола́й Алекса́ндрович Рома́нов (1868年5月18日～1918年7月17日)は、1882年(14歳)から銃殺される3日前の1918年6月30日(西暦7月13日)まで51冊の日記を書き残している。

ニコライ2世の日記はモスクワのロシア連邦国立アルヒーフ(史料館)に保存されており、1983年9月(当時はソ連中央国立十月革命史料館)、外国人としてはじめて日本の保田孝一岡山大学教授が閲覧した。

保田孝一は『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』<sup>1</sup>を書き、ニコライ2世が「天津で津田三蔵(つださんぞう)に斬りつけられたことを根に持ち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようとした」人物であったとの俗説を覆すニコライ2世像を描き出した。



### 2. 皇太子ニコライ(当時22歳)の訪日(1890[明治23]年11月4日～1891年8月16日)

#### 2.1. 全日程

軍艦「アゾフ記念 Па́мять Азо́ва」号で、オーストリアのアドリア海に面するトリエステ港[現イタリア]を出港。長崎<sup>2</sup>到着時のロシア軍艦は7隻。

エジプト(ナイル川をアスワンまで遡行)、スエズ運河、インド、セイロン(現スリランカ)、シンガポール、ジャワ島、サイゴン(現ホーチミン)、ショロン(ホーチミン郊外)、バンコク、香港、広州[コワンチョウ]、揚子江を漢口[ハンコウ](現武漢[ウーハン])まで遡行、長崎(1891年4月27日～5月5日)、鹿児島、神戸、京都、大津(5月11日)。



#### 2.2. 日本旅行の詳細

- 4月25日 「私の心はずっと以前から長崎にある。予定より2日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ。」
- 4月26日 「日本旅行の準備のために『お菊さん』<sup>3</sup>を読み始めた。」

<sup>1</sup> 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』講談社学術文庫、2009年(朝日選書1990年版の再版)。

<sup>2</sup> 1855年2月7日の日露通好條約(日露和親条約・下田條約)締結後、長崎はロシア東洋艦隊の越冬地となっていたため、ロシア海軍にはなじみの土地であり、長崎に滞在する海軍士兵への慰問も兼ねて、皇太子ニコライの日本での最初の寄港地として選ばれたと考えられる。

<sup>3</sup> ピエル・ロティ(Pierre Loti)、本名ルイ・マリー=ジュリアン・ヴィオー(Louis Marie-Julien Viaud, 1850年1月14日～1923年6月10日)の小説。野上豊一郎翻訳が岩波文庫から、関根秀雄訳が河出文庫から、根津憲三訳が白水社から、それぞれ出版されている(いずれも著者名はピエール・ロチとなっている)。ピエル・ロティは現役フランス海軍士官にして作家であった。ロティは、1885年と1900年に長崎に滞在しており、1回目の滞在経験をもとに、日記形式の小説『お菊さん』を書いている。現代日本人の立場からこの小説を客観的に評価するのは難しい。「かれは皮肉たっぷり、日本人のすることなすことに驚き呆れて見せて、さんざん日本と日本人の悪口を言っている。だが、じっさいに目に映ったこと、耳に聞こえたこと、舌で味わったことを、一切の感傷を排して率直に写生的に書き記したことも事実で、そこからかえって、お菊さんへの情愛、長崎への愛着が色濃くにじみ出ているように感じられる。しかも、同じ作品の中に、かれがお菊さんの母親の家を見て、その当時フランスの上流階級で流行っていた過度に華やかな装飾としてのJaponisme(日本趣味)は偽物だと断ずる箇所があることから、日本的な簡素の美というものがたしかにあることが、かれにはわかっていたことがうかがわれる」といった評価がある一方で、「あまりにも日本や日本人をこきおろしており、差別用語大満載の書物」との評価もある。また、米国人ジョン・ルーサー・ロングが小説として書き、米国の劇作家デーヴィッド・ベラスコが戯曲とし、これらに基づいてブッチャーニが作

- 4月28日 「12時に有栖川宮威仁親王<sup>4</sup>が艦にやってきた。彼は1889年にガッチナ宮（サント・ペテルブルク郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ。」  
「長崎市の家屋と街路はすばらしく気持ちのよい印象を与えてくれる。いたるところ掃除が行き届き、ござっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった。」  
この日ニコライは7軒の商店を訪れた。江崎鮫甲店<sup>5</sup>にはそのときにニコライが名刺代わりに与えた「善人江崎栄造殿 皇太子ニコライ」と書かれた肖像写真が現在でも残っている。「昼食の後に右腕に竜の入れ墨をする決意をした・・・竜は見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった。」
- 5月4日 「稲佐村のグリツィン（長崎駐留将校）宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語をしゃべり非常に好感が持てる。」  
その後（日本側その他の史料によると）、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓5名を招き、5日午前4時帰艦。
- 5月6日 鹿児島島の島津忠義邸を訪問。忠義の贈呈した薩摩焼の壺がエルミタージュに残されている。島津忠義・忠重親子はその後も日露交流を推進。
- 5月9日 神戸入港、午後6時過ぎ、列車で京都市。京都市盲啞院を訪問し、京都市に2,000円を寄付<sup>6</sup>。
- 5月11日 琵琶湖遊覧の帰途、大津町（現、大津市）で警衛中の滋賀県巡査・津田三蔵に斬りつけられ、頭部に軽症を負ったが、同行のギリシア王子ゲオルギオス<sup>7</sup>と二人の車夫に助けられた<sup>8</sup>。  
「有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった。」
- 5月13日 「日本のものはすべて4月29日（大津事件のあった日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからと、善良な日本人に対して少しも腹を立てていない。」  
明治天皇が東京から急速京都の宿舎に見舞いに駆けつける<sup>9</sup>。

曲したオペラ『蝶々夫人』もそうだが、「現地妻」という、現在の立場からするとジェンダー論的に大いに問題となる存在を肯定的に描いていることなどもこれらの作品が厳しく評価される理由かも知れない。しかし、少なくとも、皇太子ニコライはこれを読んで、ますます長崎と日本の訪問に胸をふくらませていたことが、その日記からは窺われる。

<sup>4</sup> 有栖川宮威仁（ありすがわたけひと）親王（1862年2月11日～1913年7月5日）。皇族、海軍軍人。1881年1月9日から1883年6月6日まで英国海軍大学留学および仏米訪問、1889年2月から1890年4月まで米、仏、英、露、スペイン、スイス、北欧各国歴訪等の国際経験を買われて、皇太子ニコライの接待役を命じられていた。なお、いったんは皇女和宮と婚約したものの、公武合体論により和宮は14代将軍徳川家茂に降嫁することになったため、和宮との婚約を破棄された有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王は異母兄。

<sup>5</sup> 1709年創業の鮫甲専門店の老舗。サント・ペテルブルクの中央海軍博物館に、皇太子ニコライが5代目江崎栄造から贈られた鮫甲（べっこう）製の「アゾフ記念」号の模型が残されている。

<sup>6</sup> 『京都府誌 上』京都府、1915年、708頁。京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊した。ニコライには洋室があてがわれたが、それを断り、日本間に泊まった。その建物は現在の安養寺に移築されている。市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存）。夜は、八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村家（現在の中村楼）」を密かに訪ねており、その部屋も現存している。

<sup>7</sup> ギリシア王子ゲオルギオス（Πρίγκιπας Γεώργιος της Ελλάδας 1869年6月24日～1957年11月25日）。父親はデンマーク王子からギリシア国王となったゲオルギオス1世（Christian Wilhelm Ferdinand Adolf Georg, Γεώργιος Α΄ της Ελλάδας, 1845年12月24日～1913年3月18日）、母親はロシア皇室出身のオリガ・コンスタンチノヴナ（Όλγα Κωνσταντινοβνα, 1851年9月3日～1926年6月18日）で、ロシア皇帝アレクサンドル2世（Александр II, Александр Николаевич Романов, 1818年4月29日～1881年3月13日、ニコライ2世の祖父）の弟コンスタンチン大公（Константин Николаевич, 1827年9月9日～1892年1月13日）の娘である。また父親のゲオルギオス1世の妹マリアは皇太子ニコライの母親である。したがって皇太子ニコライとギリシア王子ゲオルギオスは従兄弟（いとこ）同士である。

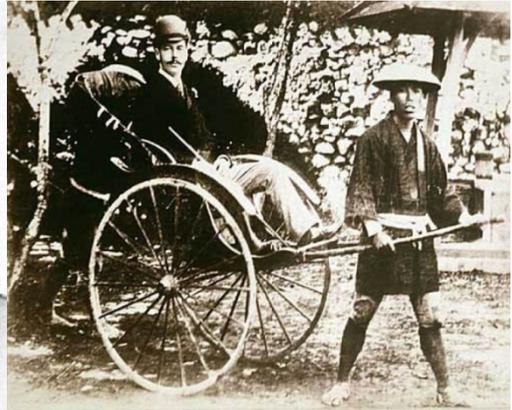
<sup>8</sup> ニコライ一行を一目見ようと見物客でこった返す市街地の旧東海道を左折したところで、事件は起きた。犯人を取り押さえたのは、車夫の北賀市太郎、向畑治三郎の二人で、のちに彼らにはロシアから勲章が与えられた。琵琶湖文化館にはサーベルと血染めのハンカチが残っている。ポリシェヴィキ政権成立後の1918年7月17日に射殺されたニコライ2世とその家族の遺体が第2次世界大戦後、処刑地のエカチェリブルクのイバチェフ邸の近くの森で発見され、1994年にDNA鑑定により間違いなく本人のもつとされたが、このときのDNA鑑定の材料に使用されたのがこの琵琶湖文化館に所蔵されるハンカチに残されたニコライの血痕であった。

<sup>9</sup> 大國ロシアの皇族を日本の警察官が襲うという前代未聞のこの事件で、国内は騒然となったが、天皇の見舞いを皮切りに、日本全国からさまざまな見舞い品がニコライのもとに届けられた。京都では、川島織物の川島甚兵衛が謝罪の気持ちを込め

- 5月16日 日本旅行（上京）を中止し、ヴラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令が来る。  
 5月19日 明治天皇、アゾフ号に行幸。この日までに多くの市民からの見舞いが届く。ニコライ、離日。



ギリシア王子ゲオルギオス（左）と皇太子ニコライ



人力車による観光

### 3. ニコライ2世と日露戦争

皇太子ニコライの極東行幸は、ヴラジヴォストークでのシベリア鉄道起工式に皇帝の名代として参加することであった。

ニコライが大津事件に遭ったことで、日本嫌いになり、のちの日露開戦の遠因となったという俗説があるが<sup>10</sup>、すでに見たように、事件当時のニコライの言動や日記等にも日本嫌いになったことを示すものは見当

て、双頭の鷲（ロシア皇室の紋章）と菊の紋章（日本の皇室の紋章）が描かれた縁取りのある、「犬追物」の図柄の、畳6畳敷きほどの大きさの綴織壁掛を寄贈している。これはエルミタージュ美術館に現存しており、職人が7人がかりで1年半の歳月をかけて制作されたと言われている。また川島は等身大の舞妓人形も贈ったとされる。いずれにせよ、綴織壁掛は美術品として見ても見事な作品で、これをきっかけに、川島織物はロシア皇室御用達となっている。また寺院の灯笼が1対贈られたが、これは徳川ゆかりの東京の増上寺清揚院殿のものと言われている。他方、日本政府は、この事件によりロシアとの関係が悪化することを恐れ、内閣・元老らを中心に、犯人に対して旧刑法第116条（大逆罪）を適用する動きがあったが、大審院長・児島惟謙（こじま・これちか）が通常謀殺未遂を適用するよう主張し、その結果、1891年5月29日、大審院は無期徒刑（懲役）の判決を下した。この判決後、青木外相は辞職し、後任には初代ロシア公使だった榎本武揚が任命された。大津事件についての同時代の記録は、尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫、1991年に詳しい。

<sup>10</sup> こうした俗説を広めるのに大いに貢献した例として、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』（文藝春秋、1969～72年）がある。もちろん、小説はフィクションだからと免罪することもできる。しかし、啓蒙書・学術書となると、そうはいかない。日本でも数多くの研究書が翻訳出版されているフランスのロシア史家エレヌ・カレル＝ダンコースは、『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』（藤原書店、2001年、原著は1996年出版）の中で、大津事件について次のように書いている。「大津で一人の日本人青年が皇太子に襲い掛かり、サーベルの一撃で頭が骨に裂傷を与えた。傷は比較的に深く、傷痕と頭痛を残すことになるが、脳にまでは達していなかった。この襲撃事件の真相は決して分からず、矛盾する説明がなされた。神域での皇太子の態度が尊敬の念を欠いていたと判断して激昂した日本人の犯行説？ 若い日本婦人にしつこい視線を送ったことへの嫉妬心からの犯行説？ ともあれ、この思慮を欠いた行為の説明がどうであろうとたいした問題ではない。その代わり、事件が及ぼした結果は検討に値する。1881年のテロ事件以来、ニコライは、爆弾で手足を吹き飛ばされて瀕死の状態で祖父の思い出と、テロ襲撃への恐怖心にさいなまれていた。自ら体験したばかりの襲撃事件は、辺りに潜む危険と、それから身を守るために必要な権威についての妄想をいっそう深めさせた。その上、ニコライはアジアにも日本にも好奇心を抱いたことは決してなかった。彼の極東旅行は、読書によっても、いかなる考察によっても準備されなかった。彼にとって、日本は奇妙で、未知で、敵意を含んだ世界だった。大津事件は、彼が理解しようと努力しなかった国に対する嫌悪感を強めさせ、日本人は野蛮人であると確信を深めさせることになる。以後、彼は軽蔑を込めて日本人を『猿』扱いすることになる。この軽蔑心は、日露戦争時に優越感と無分別さとなって彼の行動に現れることになる。（中略）若きプリンスがアジア的なものに敵意を抱き、『猿ども』が住んでいると考えているこの宇宙で中国人と日本人の判別も不可能だったことを考えるならば、彼が自分に課されている義務を果たすやいなや、文明の天国であるペテルブルクに向け出発を急いだことは想像に難くない（74-75頁）。数多くの翻訳が出版されている世界的に著名な（？）歴史家だからと言って、書いていることすべてが正しいわけではないという好例がここにある。カレル＝ダンコースは、この著作の中で、ニコライの日記について言及してはいるが、この引用部分を見ただけでも、おそらくニコライの日記を直接に読んでいないし、ニコライの日記に関するすぐれた研究書にもあたっていないと想像できる。いずれにせよ、「ニコライ二世」の名を冠したこの著作が、少なくとも来日時の皇太子ニコライの実像にはまったく迫っていないことだけは確かである。さらに言えば、大津事件が原因でニ

たらない。

また、本人の日記の記述ばかりでなく、大津事件の後もニコライの日本に対する感情が変化しなかったことを伝える資料は少なくない。例えば、1891年8月にペテルブルク郊外に帰着したニコライを出迎えた日本の西徳二郎駐露公使は、「我邦ニ対シテ悪シキ感シハ毛頭保タレサル趣」と報告している（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第15号「露国皇太子待迎ノ件」）。また、翌1892年1月20日、西公使がアニチコフ宮殿にニコライを訪問し、明治天皇の親書、日本の古い武器一式などを贈呈した際、ニコライは、「おほ（お）きにありがた（と）う」と日本語で感謝の意を伝え、「予ハ貴国ニ対シテ誠ニ好キ感情ヲ保テリ」と繰り返して述べたことが報告されている（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第1号、1892年1月21日）。以上は、外務省外交資料館特別展示「日露関係のあゆみ:1855-1916」の解説に基づく（[http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j\\_russia\\_2005/2\\_2.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_russia_2005/2_2.html) [2011年5月23日アクセス]）。

以上のことから、少なくとも、当時の日本政府は、ニコライ2世（1894年に皇帝即位）が反日的ではなく、日本に好感を持っているということ認識していたと考えてよいであろう。

開戦直前の日記には日露関係についての具体的な記述が少なく切迫感がない（政治から切り離されていた？）。

1904年2月9日開戦時の日記は「日本軍の厚顔な行為」と記しており、津田を狂人と書いた以外のもう一つの日本人に対する罵りの言葉であった。

#### 4. ロシアと長崎<sup>11</sup>

皇太子ニコライが1891年5月に立ち寄った長崎の稲佐地区が、ロシア人から「ロシア村 Русская деревня」と呼ばれるまでになったのは、ニコライ訪日の30年も前の万延元（1860）年、長崎港を「極東」における医療的良港として見出したリハチョーフ И.Ф. Лихачёв 艦隊が臨時海軍病院およびロシア水兵専用の遊廓「魯西亜マタロス休息所」を置いて以降のことである。ロシア艦隊は、その後も常に長崎港における医療環境の向上に関心を寄せ海軍病院の拡充に努めバーニャ（ロシア式サウナ風呂）を設置した他、修繕所（バッテリーや帆布用）等の小規模施設を置いて艦隊の便宜を図った。そして、周辺には、ロシア海軍士官の住宅、ロシア海軍軍人向け商業施設や料亭（諸岡まつが経営する **Волга** が有名）、「ロシア将校集会所」や上述「魯西亜マタロス休息所」等の遊興施設などがあって、ロシア海軍関係者で賑わっていた。

ロシア海軍士官は、その住居に「現地妻」を置いている者もあり、女中、下男、従者など日本人雇用者もいたため、皇太子ニコライの訪日当時、すでにロシア語を解する多くの日本人が稲佐にいたと考えられる。温暖で風光明媚、文化的水準の高い長崎、とりわけその稲佐地区は、極東に勤務するロシア・エリートたちにはよく知られた場所で、皇太子ニコライ訪日後の1890年代半ばには、ロシア人向けホテル **Весна**（「春」の意。経営者は道永えい＝稲佐お栄、のち諸岡まつが経営）さえ開設されている。

こうした、長崎稲佐地区の繁栄は、イギリスをはじめとする各国との間に結ばれた通商航海条約の発効により、1899年、「不平等」条約が一部改正され、領事裁判権が撤廃されて居留地が廃止されるまで続いた。

日露戦争後、捕虜となったロシア海軍士官・水兵 9,000 人以上が稲佐地区に滞在していたことも知られている。稲佐にある悟真寺は現在でもロシア人墓地があることで有名で、このロシア人墓地には、ゴルバチョフ・ソ連大統領が1991年に訪日した際に訪問している。悟真寺とロシアとの縁はプチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因している。

---

コライ2世が日本嫌いとなり、日本人を「猿」呼ばわりしているという俗説が、フランスの学者によっても信じられているということのほうがむしろ興味深い。

<sup>11</sup> ロシア艦隊と長崎の関係については、とりあえず、宮崎千穂「不平等条約下における内地雑居問題の一考察—ロシア艦隊と稲佐における「居留地外雑居」問題—」『国際開発研究フォーラム』27（2004年8月 <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/27/04.pdf>）および同「外国軍隊と港湾都市—明治30年代前半における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心に—」『スラヴ研究』No. 55（2008年 <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/39242/1/55-008.pdf>）を参照。後者には、各年のロシア艦隊入港回数など貴重な統計も示されている。